

猿投窯の古窯跡分布からみた生産構造

浅田 員 由

1. はじめに

猿投窯における生産拠点の推移は、大局的にみれば、名古屋市東部、東山丘陵地帯から東進し、尾張・三河両国の国境をなす境川上流域に展開し、12世紀には全域に拡大し、その後次第に、常滑窯と瀬戸窯に収束されていくことが古窯跡の分布から確められる。しかし、きわめて政治的・経済的な生産活動である窯業生産は、たとえば植物が生育適地を求めて自然に拡散し、今ある分布状況を示すのとは異なり、より計画的な立地が行われていたに違いない。特に、基本的には自給自足経済を脱し得ない奈良時代から平安時代にかけて、商品生産を求められた窯業は、当初から計画的な生産構造をもっていたものとおもわれる。とすれば、窯の立地は（現在からみれば古窯跡の分布ということであるが）経営者の意志を強固に反映しているものといわなければならない。つまり、何者にも縛られない自由な陶工達が、自らの意志で自由に生産活動を行った結果として、現在の古窯跡分布があるのではないということである。勿論、窯の立地には、良質な陶土の有無等、技術的な条件も多く、そのことが同一地域における窯の分布の濃淡を示すこともあろう。また、猿投窯の成立期には、まだ広大な原野・森林が残されていて、その意味では窯の立地は比較的自由であったに違いない。

一方、窯の築造とそれに伴う窯業生産は、山林の伐開、陶土の採掘、さらには製品の成形と焼成、その後の運搬等、きわめて大規模な原野・森林の開発と組織力が必要とされる。当然、窯業生産には、強大な財政力が求められるのである。このことは、近世においても、窯業生産はリスクの多い事業であったことから推測できる。

このような観点から、猿投窯の古窯跡分布を検討してみると、ある段階から、かなり広範囲に計画的に立地していることが知られる。また、その立地は、長期にわたり継続的に行われていたとおもわれるのである。つまり、猿投窯の古窯跡の分布は、陶工達による自由な占地の結果ではなく、計画的な配置の結果によるものではなかろうかということである。

2. 陰刻花文陶器の生産

猿投窯における最も重要な生産拠点の一つは、愛知郡東郷町と西加茂郡三好町の境界付近、米ヶ廻間と呼ばれる谷奥にある。この谷を挟む両側の斜面に、K-14号、K-90号、K-89号の標式窯が並んでいる。これらの窯の特徴は、他に類をみない華麗な陰刻花文陶器を出土することである。陰刻花文陶器は、国府や郡衙あるいは大寺院からの出土が大半で、猿投窯製品の中でも別格であったことが窺われる。また、これを生産した窯も、近年の調査によって増大しているとはいえ、30基に満たないものといえる。このことから、この米ヶ廻間地区における窯業生産が、如何に特別なものであったかは理解できよう。

この陰刻花文陶器の初源は、K-14号窯にあり、越州窯の青磁碗を忠実に模写した灰釉碗を出土していることなどから、この時期に青磁の模倣が始まったものと考えられている。この地区においては、陰刻花文陶器の生産は、K-5号、K-15号、K-90号、K-89号窯へと、連続して

行われていて、周辺地域が、せいぜい一時期だけ、陰刻花文陶器を生産していたに過ぎないことと様相を異にしている。つまり、米ヶ廻間地区は、陰刻花文陶器生産の本拠であったのである。それでは、陰刻花文陶器は、猿投窯にとってどのような意味があるのであろうか。

奈良時代から始まる灰釉陶器の初期は、浄瓶や水瓶にみられるように、明らかに金属器（佐波理）を模したものが多い。当然、釉調も暗緑色、灰黒色を呈している。しかし、平安時代初期に、胎土が白く、明るい淡緑色の灰釉を施した製品があらわれてくる。このあたりを転換点として、青磁の模倣が始まるのであろう。時代からいえば、漸く平安遷都の効果が表われ、新しい文化が興ろうとする時である。奈良三彩に代わる新しいやきものが越州窯青磁であったのである。

唐においても最高の賛辞を得た越瓷は、きわめて貴重品であり、多くの需要を満たすためには、三彩同様、国産化する必要があった。そこで、既に灰釉陶器の生産に成功していた尾張東部丘陵で、越瓷の模倣が始まったのである。しかし、青磁の焼成は成功しなかった。おそらく試行錯誤の結果、奈良三彩の技術を生かした、緑釉陶器による越瓷の模倣に転換したのであろう。この緑釉陶器による写しが尾張国で始まったのか、最初に平安京の官工房で行われたものが、尾張国へ移されたのかは、今のところ明らかではない。いずれにせよ、平安京出土の緑釉陶器と尾張国の窯跡出土品の検討から、時間的な差はほとんど考えられないといえる。

尾張国における緑釉陶器窯は、猿投窯鳴海地区（名古屋市緑区鳴海町）に設けられた。この地域は、東海道の要衝にあり、古代から生産力の大きい地域であるところから、こうした特殊な窯業生産を行うのに適した土地である。「日本後紀」弘仁6年の条に記載された、いわゆる「弘仁瓷器」は、このあたりの状況を物語るものである。この鳴海地区における緑釉陶器生産は、単なる越州窯青磁の模倣にとどまらず、猿投窯独特の、優美な陰刻花文陶器を生み出すのである。9世紀初頭の越州窯青磁は、これほど華麗な文様を刻していない。中国の青磁に多様な陰刻文様が施されるのは、五代から宋にかけてのことである。このことから、猿投窯の陰刻花文は、中国製青磁の模倣とはいえない。この陰刻花文の技法は、鳴海地区ではあまり継続することなく、緑釉陶器生産の衰退と共に消えてしまい、黒笹窯の米ヶ廻間及びその周辺に継承されるのである。

K-14号窯を始めとする、米ヶ廻間地区の陰刻花文陶器の特徴は、緑釉陶器が発見されていないことである。勿論、灰釉を施釉したものもみられるが、多くは白胎無釉の製品である。緻密な胎土を使用し、丁寧に成形した後、器表に磨きかけた製品は、緑釉陶器の素地とされている。しかし、最近の調査では、白胎無釉の製品が、寺院や官衙遺跡から出土しており、必ずしもこれらがすべて緑釉陶器の素地とはいきれない要素を残している。

3. 陰刻花文陶器の種類

陰刻花文陶器としては、緑釉、無釉、灰釉の3種類が生産されている。このうち、無釉陶器は緑釉陶器の素地とも考えられることがあるように、成形技法は、緑釉の製品と差がない。灰釉の陰刻花文陶器は、二種類ある。一つは、緑釉陶器と同質の器胎に灰釉を施したもので、一つは、やや粗い胎土で、成形も通常の灰釉陶器と同じ製品に花文を陰刻したものである。後者の花文は、稚拙なものが多いところから、時代の差であるかもしれない。

これらの陰刻花文陶器が生産されていた時代、我国の輸入高級磁器は、青磁以外に白磁があり、この3種の陶器は、それに対応するものであった。つまり、緑釉と灰釉の施釉陶器は青磁に、無

釉陶器は白磁の製品を模倣したものといえよう。なかでも、緑釉陶器による青磁写しが最も高級品であったことは、出土例から推測できる。

緑釉陶器は、奈良三彩以来の技術を継承し、その技法は既に確立されていたものと思われるが、難点は釉薬原料の入手にあった。緑釉の製作には、溶剤としての酸化鉛（黒鉛）と呈色剤の酸化銅（緑青）が必要で、ここに制限が加えられると、緑釉陶器の生産は不可能となってしまうのである。今のところ、米ヶ廻間地区の窯跡からは、緑釉の直接的な痕跡は発見されていない。従来言われているように、白胎無釉陶器が緑釉陶器の素地とすれば、K-14号、K-90号、K-89号窯等では、緑釉焼成は、別の窯で行われたものといわなければならない。緑釉は低温度で溶融するため、土師器窯のような小型で簡単な窯で充分焼成できるため、この可能性は大きい。しかし、鳴海地区の窯やI-24号窯のように、緑釉陶器そのものが出土している場合と較べて、緑釉素地と断定することにはややためらいがある。

最近の調査によれば、尾張国衙関連遺跡や尾張元興寺跡のように、かなりの遺跡から、白胎無釉の陰刻花文陶器が出土している。すべてが緑釉の剥落したものと考えられないので、白胎無釉陶器が製品として使用されたことは明らかである。このことから、白胎無釉陶器は、必ずしも緑釉陶器の素地とはいえないのである。とすれば、米ヶ廻間地区の陰刻花文陶器は、当初から白磁を模倣したものの可能性があるのである。むしろ、その方が主体であったものかもしれない。何故ならば、この地区の窯跡からは、灰釉を施した陰刻花文陶器が出土しているからである。

灰釉陰刻花文陶器の代表例である、上総国分寺関連遺跡（市原市）出土の浄瓶は、米ヶ廻間地区の窯で焼かれたものにはほぼ間違いがないが、これなどは淡黄色の青磁を狙ったものと考えられるのである。このような灰釉を施した陰刻花文陶器の破片は、K-14号、K-90号窯などから出土しているが、量的には多いといえない。一つには、高火度で焼成する灰釉陶器では、鉄分が呉麻粒状に発色し易いことと、灰釉が流れ易く安定しないことなどから、きれいに仕上がらないためである。本来ならば、軟質陶である緑釉陶器よりも、硬質陶である灰釉陶器の方が、より青磁に近い製品であるにも拘らず、当時の需要層は、表面上良く似ている緑釉陶器を好んだのであろう。しかし、緑釉の量に限界がある以上、緑釉陶器の生産もそれに制約される。そこに、灰釉や白胎無釉の製品が存在するのである。

4. 陰刻花文陶器窯の分布

9世紀前半、猿投窯の陶器生産は越州窯の青磁を模倣することによって転換期を迎える。陰刻花文陶器は、この磁器写しの段階に登場してきていることは間違いない。そして、陰刻花文陶器の出土は、官衙・寺院においてもより限定されているところから、磁器写し製品の中でもより貴重品であったことが窺われる。この陰刻花文の存在が、質の劣る猿投窯陶器を、輸入中国磁器に対抗せしめる唯一の手段であったのかもしれない。

陰刻花文の技法は、米ヶ廻間地区のK-14号窯に出現する。この窯は、9世紀前半に比定される標式遺跡で、国内から出土する越州窯青磁に酷似した、蛇ノ目高台平碗等がみられることから、磁器写しに転換した最初期の窯と考えられている。K-14号窯出土の陰刻花文の特徴は、文様が定型化していないことである。猿投窯の陰刻花文の基本パターンである四弁花文が、木ノ葉文や菱形文など、多様な形体をとっている。これは、文様の構成が始源的で、まだ整理されていない

段階とおもわれるのである。このK-14号窯の陰刻花文に類似の文様を持つ陶器は、樫原遺跡（廃寺）等平安京跡からの出土が多い。このことは、最初期の陰刻花文陶器は、地方の官衙・寺院に供給できるほど大量に生産していなかったことを示している。

また、この陰刻花文は、花卉の先端部に細かい筋が毛彫状に描かれ、文様に立体感を出している。この技法は金属器の刻文にみられるところから、陰刻花文と毛彫工人との関連も指適されているが、その真偽はさておき、陶器の文様の祖形が金属器にあったことは確かであろう。しかし、K-14号窯にみられる多様な花文は、急激に定形化される。それがK-90号窯に典型的な四弁花文である。K-14号窯の段階であらわれた多様な花文は、単純ですっきりした四弁花文にまとめられ、パターン化されるのである。

K-90号窯期が陰刻花文陶器の最盛期である。多賀城跡、相模国府関連遺跡、斎宮跡など、地方の官衙から、大量に陰刻花文陶器が出土するのは、この時期のことである。これは、花文がパターン化して制作が容易になったためとおもわれる。それはまた、米ヶ廻間地区の周辺においても陰刻花文が生産されることを意味している。

5. 窯業経営の規模

現在の古窯跡の分布が、自然発生的に窯が築かれた結果ではなく、経営者による計画的な立地によるものであるとすれば、古窯跡の分布から、窯業生産の実体が窺えるであろうか。また、一群の古窯跡は、果してその展開の法則をもっているのであろうか。このことを、陰刻花文陶器窯を軸として考えてみたいとおもう。

猿投窯の黒笹地区は、K-14号、K-90号窯等の存在する米ヶ廻間の谷から東及び東南の丘陵地に広がっている。このあたりは、西加茂郡三好町福谷及び筋生地区で、最近、開発による発掘調査が行われているところである。この調査によって、これまで知られていなかった、陰刻花文陶器窯がいくつか発見されている。いずれも、小地域に数基の窯が存在する中の1基である。米ヶ廻間地区のように、一つのグループ内で複数の陰刻文陶器窯が存在することはない。また、陰刻花文は、きわめて稚拙で、K-90号窯にみられるような華麗さはない。しかも、出土量は、1基の窯から数点程度で、きわめて少ないという特徴をもっている。これらの陰刻花文陶器窯が、猿投窯の窯業生産の中心である米ヶ廻間地区の周辺から、一定の地域に1基ずつ存在するとすれば、窯業生産の最少単位が想定できるのではなかろうか。そこで、陰刻花文陶器窯を含む一群の古窯跡を、一定の地域によって1グループとし、次の3グループを想定した。

(1) 福谷狐洞グループ

(K-11号、K-18号、K-21号窯)

(2) 福谷経ヶ峰グループ

(K-41号、K-59号、K-64号、K-27号窯)

(3) 筋生辰巳山グループ

(K-33号、K-116、K-117号窯)

(1)の狐洞地区は、境川と小石川の合流するあたりからやや上流の、境川によって開析された広い谷から東側で、東北から南西に伸びた小丘陵上に位置している。このグループのK-18号窯から、陰刻花文陶器が出土している。

(2)の経ヶ峰地区は、境川と小石川に挟まれた、南に伸びる丘陵の先端に位置している。K-27号窯から、陰刻花文陶器が出土している。

(3)辰巳山地区は、三好町内では最も東寄りの一群で、周知のK-33号の西側に発見された、K-116号とK-117号窯を含むグループで、K-116号窯から、陰刻花文陶器が出土している。

これらの古窯跡群グループは、舌状に張り出した小丘陵にあって、せいぜい3～400mの範囲に画される地域にまとまっている。その開窯時期は、グループによって異なるが、相当期間継続して操業され、一時期には1基の窯が稼働していたものもおもわれる。つまり、この各グループは、同一の陶工集団あるいは経営者によって、継続的に操業された窯であったといえるのである。それを推測させる一つの理由が陰刻花文陶器の存在である。

陰刻花文陶器が、緑釉陶器を含む高級陶器として、官窯的な性格をもつ、米ヶ廻間地区の各窯で成立、発展してきたことは確かで、それが尾張磁器であるか否かは別として、中央の需要を賄う貢納品であったことは間違いないところである。それが次第に、地方の官衙・寺院に供給されるようになり、量産化されるに従って、文様が定型化し、製作も粗雑となってくる。しかし、その生産が米ヶ廻間地区に限定されている間は、増大する需要に応えることはむづかしい。そこで、周辺の窯が、陰刻花文陶器の模倣を始めるのであろう。この時、陶工集団あるいは窯業経営者が同一であれば、米ヶ廻間地区のように、特定の地区に生産を集中するに違いない。生産を効率的にみれば当然のことである。しかし、周辺地区においては、各グループごとに、陰刻花文陶器を生産しているのである。しかも、その生産量は、きわめて微量といえるのである。

このことは、陰刻花文陶器は、各グループの内部でそれぞれ生産されなければならない事情があったことを窺わせる。逆に言えば、それぞれの窯業生産を、全体的に統制させる権力が存在していなかったことを示している。そこで、陰刻花文陶器生産は、各グループの内在する意志によって始められたのである。それは、これらの窯で描かれた陰刻花文が、米ヶ廻間地区の花文と比較して、非常に稚拙な点からもいえる。おそらく、正式な技術移転によって伝えられたものではなく、見よう見真似で写したからであろう。そのため、花文の原型は既に忘れられ、パターン化された文様を表面的に写しとっており、一見奇妙な花文が現われるのである。

6. 猿投窯における窯業生産と窯跡分布

先に述べたように、(1)狐洞、(2)経ヶ峰、(3)辰巳山の各グループが、一つの生産単位とすれば、猿投窯における古窯跡の分布から、一定の生産の傾向を窺うことができるであろうか。勿論、1グループの存在する地域の全古窯跡が調査された例はなく、既に滅失したものや、未発見のものもあることを考慮する必要はあるが、生産の立地や規模等については、ある程度、明らかにすることができるのではなかろうか。

まず、この3地区は、小河谷によって区分された舌状の丘陵地に位置しており、その範囲は、200～300m四方程度である。ここに少なくとも4～5基の窯が、連続して操業されている。また、1地区で同時期に複数の窯が稼働していることはない。

これらのことから、周辺地域においては、1地区では1陶工集団が、割合に狭い範囲を本拠として、生産活動を行っている姿が浮かび上がってくる。1基の窯が維持されるには、築窯から始まり、陶土採掘、成形、燃料の確保、焼成、運搬まで、多くの労働力と期間を有するが、食料の供

給さえ順調であれば、それ程多人数を要するものではない。各グループは、窯業技術者としての交流、あるいは血縁によって、近い関係にあったことであろう。

この地区ごとの窯の稼働状況をみれば、これら8地区を含む、三好町の北東部（東名高速道路の北東）では、同時期にせいぜい4～5基と推測できる。勿論、各地区での生産の始まりは異なるので、これは、この地区が最も発展した時代の数である。それは、おそらく、陰刻花文陶器を生産した時代を含む、前後の時代である。猿投窯における、この時期の中心的生产地である米ヶ廻間地区周辺で、この程度の操業とすれば、猿投窯全体としてみても、生産の絶対量は決して多いとはいえないであろう。ましてや、地方から出土する猿投窯製品は、この時代から一層広範囲となるのである。こうした需要の増大に対して、周辺地域で生産が活発化するの当然であるが、それは、従来の窯業生産の枠組を越えるものとなっていくのである。

陰刻花文陶器は、中央と直結する生産構造に組み込まれている。それは、緑釉の釉薬原料の確保を含めて、国衙の直接的な生産を意味している。つまり、官工房（造窯器所）による生産である。この技術は、中央政府の掌握するもので、釉薬原料と併せて、国衙（造窯器所）へ移転されたものである。それを継承した陶工集団は、三家人部乙麻呂等に代表される、尾張在住の技術者達であった。彼等は、尾張国における須恵器生産技術者の後継であり、新しい技術の創始者として、造窯器所において、陰刻花文陶器の生産にあたったのである。当然、彼等は尾張国の在地豪族に属しており、新しい技術は容易に周辺地域に移転される。

猿投窯において、造窯器所の可能性が最も高い古窯跡は、米ヶ廻間地区である。密度の濃い窯の分布、陰刻花文陶器窯の複数の存在や交通の便等を考慮した時、この地区が猿投窯の中でも特別な地域であったことが理解できる。この造窯器所の存在によって、周辺地区でも、陰刻花文陶器の生産が可能であったのである。

7. おわりに

猿投窯における発掘調査は、かつての単独窯の調査から、一つのグループ全体を調査する大規模なものへと変化してきている。こうした発掘によって、一地区における窯の操業期間あるいは移動の問題等が、少しずつ明らかになってきている。そのことは、猿投窯の生産構造を解明する上でも、非常に重大な手がかりを与えている。特に、陰刻花文陶器の存在は、これまでばくぜんと考えられてきた陶工集団のあり方に一つの方向を見出すものである。また、最近各地の官衙・寺院跡等で、灰釉あるいは無釉の陰刻花文陶器の出土がみられるようになってきたことは、これら周辺地域での生産が、必ずしもローカルではなく、広い地域へ供給されたものであったことを示している。

今後の方向としては、各地区における操業を、より細かく分析することと、陰刻花文のように特徴のある製品については、遺跡出土の陰刻花文陶器と対比させ、流通の実態を把握することである。幸い三好町内における、(1)狐洞地区 (2)経ヶ峰地区 (3)辰巳山地区については、詳細な調査が行われており、報告書の刊行をまって、さらに多くのことが解明されるであろう。

猿投窯跡分布図

